

遠藤社会学の功績

— その学史的位 置 づ け —

大 道 安 次 郎

(一)

わが国の社会学は明治30年代に入って、漸くその形をととのえかけたといえる。社会学の講座が東京大学に設けられたのは、明治26年で、外山正一博士がその講座の最初の担当者であった。

外山は「スペンサー輪読の番人」といわれたほどスペンサー社会学を中心としていた。しかし外山の後任である門下の建部はスペンサー社会学よりもコント社会学を自己の体系の中心においていた。「社会学はコントに始まり、遜吾に終る」という彼の言葉はあまりにも有名である。そして雄大な建部社会学を展開したのであった。しかしスペンサーもコントもともにその学的体系は総合社会学の立場であることはいうまでもない。だから外山も建部も等しく総合社会学の立場に立っていたといえる。

当時日本で唯一だった東京大学の社会学講座担当者がこのような立場を展開しているところから当時の日本の社会学界の主流は総合社会学の立場であったといえよう。

しかしそれは表面的なものであって、反主流派非主流派がその底に存在していたことは事実である。権威を持った東京大学の講壇社会学に対抗して、自由民権の流れを汲む者、あるいは社会問題や社会運動に関心を示す者などが一方の底流にあるとともに、他方の底流には同じ講壇社会学の内部において、その総合社会学を批判する流れが台頭しはじめていた。この流れの中心に遠藤隆吉博士がいた。

遠藤は建部と同じように戸山門下であったが、大学ではやや後輩であった。建部は戸山のあとを継いで東大の教壇に登ったが、遠藤は私学の教壇

に立った。早稲田大学、東洋大学などで教え、のちに巢鴨学園の創立者となり、学生教育にもあたった。官学と私学、この対立が官学の建部の総合社会学に対抗して、有機体的社会学の批判者としてたち現れたのかも知れない。それは兎も角として、戸山門下であったところから最初は戸山の流れを汲んで社会有機体説の立場にあったことは当然だといえるが、在野であった彼は世界の学界の傾向の空気を自由に吸い、その将来の支配的傾向をいち早く察知して、社会有機体説の立場を離れて、次第に心理学的社会学の立場を鮮明にしていた。明治33年(1900)にアメリカのギディングスの Principles of Sociology, 1896. を東京専門学校(のちの早稲田大学)の出版部より「社会学」と題して出版している。本来なれば「社会学原理」とでも訳出すべきにも拘らず、敢えて「社会学」としたのは、スペンサーの Principles of Sociology の邦訳がすでに「社会学原理」として出ているところから、それと区別せんがためであった¹⁾。しかしそれと同時にすでに彼の脳裡にはスペンサーの社会有機体説からの離脱があったのではなからうか。それかあらぬか彼はその凡例において、「原書は社会学書中蓋だし良好第一の書なり」といっている。その後も続いて、「現今之社会学」(明治34年)、「近世社会学」(明治40年)などを著して、その心理学的社会学の立場を展開した。

当時社会有機体説に批判的な態度をとった者はかなりいた。たとえば、樋口秀雄²⁾や小林郁³⁾や小山東助⁴⁾などがそれである。しかしその間にあって、遠藤は最も鮮明に、しかも最も理論的に心理学的立場を主張し、体系的な展開を行った。この心理学的立場がのちに京大の米田門下の高田保

馬博士によって「社会科学界の一平民」としての個別社会学の主張の一つの源泉となったといえよう。大正年代からの日本社会学界は高田社会学を軸として展開したといえるならば、遠藤社会学は高田社会学への過渡期の準備をしたものといえよう。

彼はその準備の路をどのようにととのえたのであろうか。以下そのことを探ってみよう。

- 注 1) 遠藤隆吉訳「社会学」, 明治33年, 凡例2頁
 2) 樋口秀雄(明治8年—昭和4年, 1875—1929)は東大文科大学哲学科卒業後, 明治大学, 国学院大学, 法政大学, 大谷大学などで教鞭をとった。「社会学小史」(明治44年), 「社会学十回講義」(明治45年)などの著書がある。
 3) 小林郁(明治14年—昭和7年)は東大出身であるが, 主として私学の拓殖大学や日本大学に関係し, また東大でも教えた。「社会心理学」(明治42年), 「コント」(明治42年), 「社会心理研究」(明治43年), 「社会学概論」大正12年(改訂社会学概論 昭和2年)などの著書がある。
 4) 小山東助(明治12年—大正8年, 1879—1919)「社会進化論」(明治42年)—「鼎浦全集」第一巻に収められている。

(二)

遠藤には, さきに触れた「社会学」(明治33年)のほかにも多くの著書がある。「現今之社会学」(明治34年), パラド原著講述「社会学」(明治36年), 「近世社会学」(明治40年), 「日本社会の発達及び思想の変遷」(明治36年), 「国家論」(明治38年), 「ウォード・応用社会学」訳(大正2年), 「社会学近世の問題」(大正4年), 「社会力」(大正5年), 「社会学原論」(大正12年)などがそれである。以上は彼の社会学関係の著書であるが, ほかの分野の著書も極めて多い。東洋哲学, 東洋倫理学, 易学に関する著書, その他数多ある。その著作目録は「楽園自伝」(彼の自叙伝, 昭和13年)に詳しい。

彼は東大において戸山教授からスペンサーの社会学などの社会有機体説的な社会学を学んだし, またその他の外国書にも接していたと思われる。しかし直接彼をアメリカの心理学的社会学へと誘ったのはギディングスの Principles of Soci-

ology や Theory of Socialisation に接した頃からではなからうか。Principles を邦訳するほどに傾倒したのもそのためだったといえよう。さきにも触れたように, 彼は同訳書の凡例のなかで, 「原書は社会学書中蓋だし良好第一の書なり」ということからも, その傾倒振りがうかがわれよう。このようなギディングスへの傾倒は, スペンサーやコントなどの総合社会学, 社会有機体説への批判と離別とを語っているといえる。というのは, ギディングスは心理学的社会学を主張しているから, それへの傾倒は社会有機体説からの離別を意味していると思われるからである。

まず順序としてギディングスの「社会学(原理)」について触れておこう。彼はその書物の序文で「社会学は心理学的科学なり。……此れ余の信ずる所にして余は主として社会現象の心的方面に注意を集めたり」といっているように, 社会学の対象を社会結合過程にあるとなし, この結合の本質を「同類意識」(consciousness of kind)に求め, 有名な同類意識説を展開している。後年ギディングスはウオットスンなどの行動心理学の影響をうけて「複数行動」pluralistic behavior の理論を展開しているが, 心理学的社会学の立場を離れてはいなかった。遠藤が影響をうけたのは, 比較的初期のものであって, その同類意識論であった。

ところでこの同類意識というのは, 生物を無生物から区別する特性であって, 或る存在が他の意識的存在を自己の同類として認める意識状態を指すものである。人間社会はまず自然的集合として成立するが, その実質的活動を支配するものは, 評価, 利用, 馴致および社会化である。社会化が生ずるには, 性質または類においてある程度の力の均衡と類似がなくてはならない。血縁的, 精神的, 可能的等の類似がそれである。この社会化の過程を構成する類似の心理的結果には, 合同の感覚, 有機的同情, 類似の知覚, 反省の同情, 愛情と認知の欲望等があるが, これらは実際においては渾然としているものであって, その心の統一的な状態がすなわち同類意識であるというのである。この説はイギリスのアダム・スミスの「同情」sympathy の観念, フランスのガブリエル・タルドの「模倣」の観念と通ずるものがある。しか

し社会を主観的側面からとらえようとする態度は明らかにアメリカのウォードの流れと同じものがあり、心理学的社会学の代表的見解の一典型といえよう。

遠藤はこのギディングスの同類意識説に共鳴して、自己の社会学の立場を構成している。ギディングスの「社会学」を訳出した翌年すなわち明治34年に、彼は「現今之社会学」を著わしている。この書物は本文65頁の小さなものであるが、彼の立場を明確に示した最初の書物だといえる。同書の巻末の「跋」に、「往年余病を得て郷里に帰へり、随意に西洋の典籍を播き、偶ま集合意識の説に思い当り、之を以て社会現象に臨むに社会現象は悉く皆な集合意識に統一せらるべき所以を知れり。即日筆を執りて斯篇を稿せり。」と記している。また同書の序文の一節に、「研鑽有年。偶得巍氏之書。以読之。反覆之久。得社会現象出於集合意識之説。」と述べている。また総論第一章「現今の社会学の弱点」において、ギディングスの名をあげて極力推奨している。曰く、「世の社会学者は皆此状態に在る者にして社会学の著書は愈々出で愈々増すと雖ども畢竟尠雑にして統一なき者のみ。此時に当り、アメリカのギッチングス氏社会学原理を著はし同類意識説を主張し、以て社会現象と他の現象との区別を律せんと試みたり。恰も是れ暗夜に明光を得たるが如く氏自ら道へるが如く社会学は此より正路を踏むて行くべきなり¹⁾。」と。また総論第二章で社会学史上に於ける同類意識説を位置づけているが²⁾、その際フランスのタルドやデュルケームにも言及しながら、ギディングスの同類意識説をつぎのように高く評価している。「是に由て之を觀れば根本的事実は印象と模倣とに密接なる關係を有することは疑う可からずと雖ども模倣又は印象其物にあらざるなり。論じて茲に到れば社会学の公準は左の事実より他なるを得ず。曰はく社会の根源たる主観的事実は同類意識なりと。ギッチングス氏は此の如くして同類意識より興る現象を以て社会的となせり³⁾。」と。もちろんこの説にも若干の批判の余地はあるとしても、「最も明白にして最も傾聴に値する者である」といっている。同類意識説は、一、社会現象は心的なること、二、社会現象の起る前には精神内に自他の觀念あることの二点を含

摂しており、この意味において、実によく社会現象の本質を摘出したものといえるとして、同類意識説を高く評価しているのである⁴⁾。

もちろん遠藤はギディングスの同類意識説に全面的に賛成しているとはいえない。「猶ほ慊焉たる者あり」といって、つぎのように批判している。「ギッチング氏の同類意識の觀念中に自他の觀念あり、随て社会的の觀念ありと雖ども社会の觀念あることなきなり。自他の觀念は猶ほ未だ社会の觀念ならず。故に自他の觀念より出る行為は猶ほ未だ社会現象たるを得ざるなり。」「自他の觀念の代りに猶ほ更に一層深き処の社会の觀念より起るもの即ち此れ社会現象なり。」といている⁵⁾。このように批判して、「集合意識」を以て社会現象の特徴とすべきだと主張している⁶⁾。

「集合意識」について、彼はつぎのように述べている。「所謂集合意識とは各個人が有する社会觀念なり。社会は精神の聯合なれども肉体の方面あり。社会觀念の中には個人個人の精神状態並びに肉体状態を含む者なり。勿論此の觀念には明と不明とあり。殊に野蛮人の或る者は殆んど社会の觀念なかるべく、開化国と雖ども婦女子は猶ほ社会の一部のみを意識し居るは目づらしからざるなり。実に全社会の觀念を有する者は殆んど是れなかるべきなり。」と⁷⁾。

彼は「現今之社会学」の跋文の最後を、「今や社会学の声は諸方に歎呼せらる。社会学が単に諸社会科学の簇集ならば兎も角。苟も一個独立の科学として建設せられむには其れ唯だ集合意識説に由るのみ。其れ唯だ集合意識説に由るのみ。」と集合意識説という言葉を二度繰返して結んでいる⁸⁾。彼が如何に集合意識説に自信を持っていたかが明らかであろう。

このように見てくると、彼はコント流の百科全書的 sociology (旧型の綜合社会学)、社会有機体説——従って建部社会学——と明白な対立を示し、社会学を独立科学として樹立しようと試み、その抛りどころを集合意識説に求めていたといえる。

ところで彼は明治40年に「近世社会学」を著している。明治34年の「現今之社会学」は本文が65頁という小さなものであり、彼の社会学のスケッチというならば、「近世社会学」は本文 470頁、附録の「社会史論」を含めるならば、優に 500頁

を越える大著であり、彼の社会学体系を展開したものとえよう。もちろん明治34年から明治40年の間に、彼は「日本社会の発達及思想の変遷」、「国家論」などを著している。

さて「近世社会学」であるが、その序においてつぎのようにいっている。「コムトに由りて作られたる社会学も其名称の斬新なるがために靡然として学者の注意を惹起せり。就て其の対象を看れば即ち複雑錯綜人をして茫然自失せしむ。是に於てか其要を釣らむと欲し、或は社会有機体説をなし、或は欲望説をなし、又或は社会現象説をなせり。予研鑽数年学者力を致すべき処は即ち斯の第三者に在るを知れり¹⁰。」「予の浅学なる、泰西諸名家の説に於て通曉せざる所多しと雖も社会学の歴史的発達と其の系統の建て方を詳かにし、社会学の何なるやを明らかにしたる点に於て聊か確信する所あり¹¹。」と。これによって見ると、彼は社会有機体説を排し、社会現象説を採り、かなり自信をもって本書を著わしていることがうかがわれる。

そしてその序論では、社会学は記述的帰納的の科学であることを主張し、そのために具体的社会史を材料として理論化することについて述べ、社会学の対象は社会有機体説ではとらえることができない理由について、つぎのように述べている。「抑も社会有機体説はコムト氏以来、俄かに盛なり。此説は社会学の系統に於て如何なる意味ある者なるか。従来の学者此説を云々せざる者殆んど之れなし。然れども其の全く無用の弁にして社会其者を明かにする上に於て何等の益なく、社会其者が明かになりたる後、支離散漫に社会と有機体とを先例によりて比較し、評判するに外ならず。科学的の智識にあらずして常識的の智識なることを知らざりしなり¹²。」これは彼の社会有機体説に対する批判の一例であって、そのほか随所にその批判が見られる。ところで彼は社会有機体説を排して、社会現象説を採っているが、その際ギディングスへの評価は高く、随所にその同類意識説に触れている。もちろん彼は同類意識説に全幅の賛意を表わしていないことについては、さきにも触れた。また「現代之社会学」において、社会意識説を主張したが、「近世社会学」においては、人間の意志結合をもって社会現象を説明しようとし

ている。

彼は本書の本論第二章において、これまでの社会学系統（体系）について触れ、スペンサー、ウォード、ラッツェンホーファー、シェフレ、スモール、ヴィンセント、パラド、スタッケンベルグ、グンプロウィッチ、タルド、ギディングス、デュルケーム、ジンメル等の説を紹介している。その際にもギディングス、ウォード、タルドなど、さらにジンメルなどの心理学的社会学の立場を尊重していることがうかがえる。たとえば、ジンメルについてつぎのように評している。曰く「氏は人間結合の形式を研究するを以て社会学の任務となせり。人間結合は広義なるが故にタルド氏の摸倣説もデュルケーム氏の拘束説も皆其中に包含せらるるを見るなり。実に従来人間の結合を中心として研究せんとせし科学なく。氏が之を摘出したるは社会学界に於る一大功績として認めざる可らざるなり。個人の結合は即ち精神の結合にして換言すれば意志の結合たるなり。」といっている。ここにも彼の意志結合説の主張が見られる。

このようにして彼は社会学を心理学的に基礎づけ、独立科学たらしめようとしているが、彼はジンメル説と自説とを区別して、単に人間の結合を研究せんとすることと、意志の結合を研究せんとすることとの間には大いに異となし、自説の意志結合説を主張している¹⁴。

ところで彼の意志結合説は、さらに社会力説として発展した。それは大正年間に入ってからのことであって、大正4年の「社会学近世の問題」、大正5年の「社会力」、大正12年の「社会学原論」などに見られる。まず大正4年の「社会学近世の問題」にその明確な歩みが見られる。その序文でつぎのようにいっている。「社会学者が社会を研究するには、其学者の立脚地より見ることは免れない。けれども社会現象に接近して居る。是に於て社会学者の立脚地は何であるかということを見なければならぬ。吾人は之を以て社会力より見たるものと為すのである。社会力という者は、即ち具体的に人間の生活として現はれて居るものである。人間の生活として現はれて居らぬものはないのである。個人が活動する、即ち生活するのは何であるか。之を實際に現はして居るに違

いない。個人的に言へば個人の生活である。社会的に言へば社会力である¹⁵⁾。」また本文でつぎのようにいっている。「単刀直入に吾人の所謂、社会学の立脚地を述べたならば、何であるかという社会学というもの即ち社会力というものを中心として社会を観察せんとするものである。又一切の事物を観察せんとするものである。中略。簡単に其の要領を言うて見たならば、社会力というものは即ち物理力や生理力、精神力等と相並んで特に社会の中のみ行はれる力である。我々を支配する力である。此力あるが為に社会は成立して居る。此力は総てに行渡って居る、社会的産物と称するものの中に悉く之を包含して居る。此が無かった日には社会は一日も維持することは出来ない。如何にして此力を感じるか、即ち我々は余儀なくされるということを感じずる場合がある。余儀なくされると云ふのは即ち暗示である。暗示に於て最も明かに之を感じることが出来る。随って社会学は一つの現象が起った時に之を社会学的に観察せんとしたならば、先づそれが如何なる力を有するかといふことを見なければならぬのである。換言すれば如何なる影響あるかといふことを見るのである。先づ簡単に言へば此の如きを以て社会学的の見方となすのである¹⁶⁾。」と。

ところで彼は社会力説に如何にして到達したのであるか。同書の結論の四の「社会力の由来」のところ、そのことについて述べている。社会学の中心問題は人間の結合ということに存しているが、この点について、彼はギディングス、ジンメル、さらにデュルケームの説によって啓発されている。しかし彼が社会力説を説いたのは自分流のことに属する。社会力という言葉は social forces の訳ではあるが、ウォードのそれと異っている。ウォードのそれは人間の欲望を指しているからである。また社会力に近い言葉として、ボードウィンのソシオノミックというのがあるが、それは社会を形成する力という意味である。だから自分はそれらとは異った意味で「社会力」という言葉を使っている。「自分は人間を余儀なくする所の力、社会をして維持せしめ統一せしめる所の力という意味に於て之を用いたのである。権力の如きは勿論社会を維持する上に必要なものであって、茲に社会力の意味あることは因よりであるけ

れども、斯くの如く拘束するといふこと以外に於て、十分人間を支配する、即ち暗示するとか、余儀なくせしめるとかいふ様な意味に於て、社会力の存在を認めたのである¹⁷⁾。」さらにデュルケームやサムナーなどの説との相違についても論じている。デュルケーム説については、単に人間の拘束の面だけではなく、自分は人間の生活其者について社会力を見ようとしているのだといい、サムナー説については、民俗発生の由来を社会力を中心として、系統を立てて述べていないとして、自分の社会力中心説と区別している¹⁸⁾。

そして同書の最後に近いところでつぎのようにいっている。「十数年来社会学の著書に付いて、苦心に苦心を重ねて居っても容易に之を得ることが出来ぬ。今日の所は社会力なる説を以て、比較的安心を感じて居るから之を中心として茲に社会学を著して見ようと思ふのであるけれども。従来の諸先生が既に之に近いことを述べられて居るのであるから、自分が直ちに之を以て発明の説だとして述べることは出来ないのである¹⁹⁾。」そして最後をつぎのような言葉で結んでいる。

「然らば近世社会学と社会力説とは、如何なる関係にあるかといふに前者は、一般に人間の結合を述べたのである。即ち吾人は之を名づけて、意志結合と言ふたのである。然るに意志結合の結果が社会力を生ずる、或は社会力に依りて意志結合を引起させるのである。此故に同じ道理であって只一步前と一步後を述べた違ひである。全然違つたのではなく、社会学より社会を見た時、社会力より社会を見たとの差であるので、述べる中心点が幾らか異なつて来たのである²⁰⁾。」と。

大正5年の著書「社会力」は、「社会学近世の問題」で到達した結論をさらに詳細に述べたものといえる。その序文の一節につぎのようにいっている。「予は浅学非才にして進で学問を以て人の師となるには足らざれども、社会学に於ては十数年来研究する所あり。明治33年頃「現今の社会学」を著し、社会学は集合意識を以て中心となすことを論じ、次で明治40年近世社会学を著し、社会学は結合現象を以て、根本的問題となすべきことを論述せり。是より後ち社会学の中心問題を考ふことに於ては寸時も忘ることなく、何らか是に解答を得ざれば、則ち止まざらんとせしが

偶々社会力なる思想に思い至り、之れを中心問題としては如何との考へに及び、或はその欠点の発見に努めしたりしが、遂に社会力を以て中心とするの比較的に妥当なるものを覚え、茲に此の書を著はすこととはなれり。従て本書の主とする所は一、社会学の中心問題は社会力なりとなすにあり二、社会力の性質其の他を明かにせんとするにあり。而して吾人自身の意見に於ては、之れに依て以て社会学に独立なる科学としての意味を帰することを得べく、亦これに依りて社会学をして統一ある科学たらしむることを得べきなり²¹⁾。」

かくて彼は社会学を定義して、「社会学は社会力によりて余儀なくせられたる人間の行動を其分量と性質との上より研究せんとするものなり²²⁾。」としている。そしてその社会力についてつぎのようなことをいっている。

1. 「人間の相互の交通し、結合して、社会力が生ず。自然にして人為的にあらず。」「社会は吾人に先立って存在し、吾人は後れて存在す。」などいって、社会力は社会の後に生ずることについて述べている²³⁾。
2. 意志結合と社会力との関係についてはつぎのように述べている。「個人をして活動せしむるものは、ひとり社会力のみにあらず、彼の欲望の存するあり。」といい、意志結合現象は一面の生理的欲望現象にあり、他面に社会力が存在している、といっている。
3. そしてその社会力の存在についてはつぎのように述べている。「一の衣服を見れば、其が気候人種の性質社会的習慣等によつて決定せらるるを知り、其の社会力を想像すべし。」「社会の学術を見る時は同く一種の社会力を想像す同く社会力の要素静学的性質等を聯想す²⁴⁾。」

このような社会力を中心問題とするのが社会学であるというのである。そして彼はつぎのようにいっている。「社会学の書物を読むことも、因より必要なりと雖も、只社会学を通じて見たる所の社会なり。恰も哲学を研究せんとすれば則ち實際生活に於る宇宙を味はざるべからず。哲学書を通じて見たる宇宙は眞の宇宙に非ざるが如し²⁵⁾。」と。

最後に彼の「社会学原論」について簡単に触れ

ておこう。この書物は、大正11年出版のもので、彼の晩年の著作である。彼は本書において彼のいわゆる社会学系統 (system of sociology, 現在の表現でいえば、社会学体系) を目指したものであった。彼はかなりの自負をもってその系統づくりを企てたようである。「回想すればロスの社会学原理などは殆んど系統でない。ウォードの純正社会学も著者一流の見解といふに過ぎない。ギッディングスの系統も今から見れば唯同類意識の説明に過ぎない。思ひを其の他に回らしても十人十様変化底止する所を識らない。」「吾輩今回の作も自分の意に満たない。反覆沈吟寧ろ社会学の系統を思い止らうとしたこともあるが、翻て考ふれば二十余年前に意志結合の説をなし、十年を経て社会力の説をなし、今日に至り社会を共同生活と区別し、精神的聯合に求め、社会学を以て社会の発生及び其の法則を研究する学問なりとなす所に於て前後連絡があり、自分としては幾分かの進歩もある様に思はれるから敢て之を発表することにしたのである。」とその序に述べている²⁶⁾。

この序文の言葉で明らかなのは、彼のこれまでのアメリカ社会学への依存より脱して彼独自の立場を明確にしようとしたこと、そしてそれは社会を共同社会と区別し、精神的聯合に求めたことである。彼のこれまでの立場は、集合意識説から意志結合説に転じ、さらに社会力説に変じたのであるが、本書では社会力説からさらに精神的聯合説に転じている。そして社会学は社会の発生及びその法則を研究する学問だと断じている。

とすると、彼は社会と共同社会(集合体)とをどのように区別しようとしているのであろうか。「集合は宇宙に於る一種の現象であつて社会の生ずる条件ではあるが社会其者ではない。社会は人間精神の結合的現象である。社会を見るには此結合に着目すべきである²⁷⁾。」として、両者を区別している。そして社会は精神の聯絡であるから個人の精神に着目する必要がある²⁸⁾。だから、社会といえ、まず第一に個人精神の社会的活動を思い出さなければならない、と同時に第二にこの活動は数多の他の人びとによって支配せられ影響せられていることを思い出す必要がある。社会とはこのようなものとして理解されねばならないと、彼はいっている²⁹⁾。

進んで彼は社会の観念を明確にするために、イ、社会は個人心理活動の一方面であること、ロ、個人心理活動より投影されたる社会、ハ、各人共通の心理作用、ニ、社会の心理的基礎、ホ、社会と自我主義、ヘ、社会の本性は共存の意味である、などの点について詳細に論じている³⁰⁾。

本書の第三編は「社会の系統」について論じている。まず社会の統一性について考察し、権力と国家、家族及地域団体、文明、社会力の系統について論じ、第四編「社会の法則」では、結合の形式に関する法則、社会意識の勢力に関する法則について考察している。第五篇「社会の本質と其の応用」では、彼我の分析、対策、不平等、相互主義、一個体、労働至上主義、相互影響は身心両方面に涉ること、現在の身心状態は共存の結果であること、さらに人権の平等、共産の意味を探ぐり最後に、社会はパブリックファンズなりと断じている。当時のさまざまな主義や社会問題を考慮に入れての議論である。

以上が彼の「原論」のアウトラインであり、彼の展開した社会学体系である。現在の社会学的水準から見れば、いろいろな点で問題があるが、当時としては苦心に苦心を重ねての努力の結果であって、その体系化の試みに敬意を表すべきであろう。

以上私は遠藤の諸著作についてごく簡単に集合意識説→意志結合説→社会力説→精神的聯合説へと辿った変遷の跡を見てきた。これらの説はそれぞれニュアンスがあるとしても、等しく心理学的社会学の枠のなかにあるといえる。

彼の社会学はコントやスペンサーのそれと全く異っている。建部社会学とはまさに対照的である。彼の社会学にはアメリカの社会学、とくにギディングス、ウォードなどの影響が甚だしい。もちろん彼はフランスのタルド、デュルケームのものも読んでいた。またドイツのジンメルを高く評価している。しかし彼が諸外国の学者から摂取しようとしたのは、彼の心理学的社会学を強化するためであったといえる。そしてその心理学的社会学への端初はギディングスの摂取にあったといえよう。

注1) 遠藤隆吉「現今之社会学」 13頁

2) 同上 15—18頁

3) 同上 15頁

- 4) 同上 16頁
- 5) 同上 16頁
- 6) 同上 18頁
- 7) 同上 19頁
- 8) 同上 68頁
- 9) 同上 66頁
- 10) 遠藤隆吉「近世社会学」序1頁
- 11) 同上 序1—2頁
- 12) 同上 21頁
- 13) 同上 206頁
- 14) 同上 208頁
- 15) 遠藤隆吉「社会学近世の問題」3—4頁
- 16) 同上 9—10頁
- 17) 同上 283—84頁
- 18) 同上 284—85頁
- 19) 同上 285—86頁
- 20) 同上 286頁
- 21) 遠藤隆吉「社会力」序1—2頁
- 22) 同上 25頁
- 23) 同上 84頁
- 24) 同上 275頁
- 25) 同上 238頁
- 26) 遠藤隆吉「社会学原論」序1—2頁
- 27) 同上 66頁
- 28) 同上 66頁
- 29) 同上 69頁
- 30) 同上 69—89頁

(三)

さてつぎの問題は遠藤隆吉博士の社会学が日本社会学の歴史において如何なる役割を果したかを探ぐることにある。

私はとくに二つの点において、日本社会学の歴史において彼の果した積極的役割があったと思う。その一は、アメリカ社会学の導入であり、その二は、心理学的社会学を最も早く、且つ鮮明に主張したこと、そしてその後の日本社会学の主流をなした心理学的社会学への先駆的役割を果したことである。これら二つの点が、彼をして日本社会学の歴史において忘れられない存在たらしめているといえよう。

まず第一の点から触れてみよう。

明治時代の日本社会学は西欧やアメリカなどの先進国の社会学を移入することによって、社会学の体裁をととのえかけたといえる。明治20年代まではスペンサーやコントなどの総合社会学、社会有機体説、それに社会的進化論などがそれであった。しかもこれらの社会学は明治時代の国権主義を擁護する理論的バック・アップに援用された。

もちろんスパンサーの二つの柱のうちの一つの柱である「自由・進歩」の理論は自由民権論者たちの援用するところであったが、憲法発布、国会開設、教育勅語の渙発、さらに日清戦争の成果などを背景にした国権主義の圧倒的な支配に押し流されてしまった。社会学が講壇社会学としての存在理由は、この支配的体制の枠内で、しかもその体制を理論的にバック・アップする点にあったといえよう。明治30年代に入ってもその性格は変らなかつた。30年に入って新たにアメリカ社会学の導入があった。30年代の日本社会学界は、スパンサー流の社会学が前代に引続いて大きな力を残存していたし、また東大の建部遜吾博士のコント流の社会学が大きく表面に浮びあがっていたが、新たに遠藤隆吉、樋口秀雄、小林郁、小山東助などの諸氏によってアメリカ社会学の導入が活潑に行われはじめた。とくに遠藤はアメリカ社会学の導入には最も力を注ぎ、自己の社会学体系の樹立もまたアメリカ社会学よりの摂取に拠るところが極めて大であった。ギディングスの「社会学原理」の邦訳をはじめとして、ウォードその他の当時のアメリカ社会学者の諸説を摂取していた。この意味において、明治30年代以後におけるアメリカ社会学の導入は、彼に負うところが極めて大であったといえる。

その二は、心理学的社会学の主張であった。さきにも述べたように、当時の社会学の主流はスペ

ンサーやコントなどの社会有機体説、社会的進化論、総合社会学などであった。これらの流れに抗して遠藤はアメリカ社会学を導入した。そして生物学的社会学に対して心理学的社会学を主張したのであった。彼の社会学は集団意識説から意志結合説へ、さらに社会力説へ、さらに精神的聯合説へと変遷していったが、その変遷はいずれも心理学的社会学の枠内で行われており、それを深化しようとする彼の努力の跡であったともいえる。

このような彼の心理学的社会学の主張は、明らかに個別科学としての社会学の樹立を目指すものであった。それは総合社会学と対立していた。とくにコント的な建部社会学との対決を意図していたものといえよう。彼のこの企図は大正年代に入って見事な実を結んだ。京大の高田保馬博士の業績がそれである。高田博士の「社会科学界における一平民」としての社会学の主張は、個別科学として社会学を樹立することにあつたし、またその理論的基礎付けを「結合」に求めていた点もこの心理学的社会学の主張を受け入れてのことであつた。大正年代以後の日本社会学界は高田社会学を軸として展開した¹⁾。遠藤社会学は高田社会学の道を準備したといえよう。このように見てくると、日本社会学の歴史において果した遠藤の役割は極めて大きかつたといわねばならない。(1967.11.20.)

注1) 大道安次郎著「高田社会学」(昭和28年、有斐閣)